

にとつては、公共の場にいることは仕事やほかの義務と関係することが多いのだが。

多くの人にとつて、車の運転は自由とコントロールの感覚に最も密接に結びついている。彼らはそれを「考える機械」と呼ぶ。なぜなら運転中は、自分の個人的な乗り物の保護してくれる藪の中で、邪魔されることなく自分の問題に集中し、感情的な問題を解決することができるからである。シカゴのある製鋼工は、個人的な問題をひどくストレスに感じるといつも、仕事の後で車に飛び乗り、西に向かつてミシシッピ川に着くまで運転し続ける。川辺のピクニック場で敷時間を過ごし、静かに水が流れるのを見つめる。それから車に戻り、ミシガン湖に朝焼けが昇る頃に家に着くまでには、平安を感じている。多くの家族にとつて、車は集いの場でもある。家では、両親と子どもは別の部屋でバラバラになって、別のことをしていることが多い。車に乗って出かける時には、一緒に話し、歌い、ゲームをする。

家の中のいろいろな部屋はまた、独自の感情的側面をもっている。なぜなら、それらは別の種類の活動のためにセッティングされているからである。たとえば、男性は地下室にいる時に気分よさを報告するが、女性はそうではない。おそらく、男性は地下室へくつろぎに行くか、趣味のことをしに行くからだろう。一方、女性が地下室へ行くのは洗濯のためである。女性が家にいる時、一番気分よく過ごせるのはバスルームにいる時で、そこにいる間は比較的家庭の要求から自由だといえる。キッチンにいる時は、比較的楽しい活動である料理に関わり、コントロールの状態にある

(男性は実際には女性よりも料理を楽しむ。これはきつと、男性は一〇回に一回しか料理せず、したがって自分のやりたい時にやれるからである)。

生活する環境がどのようにに人の精神に影響するかについて、多くのことが述べられてきたが、この問題についての体系的な知識は、実際にはほとんどない。遠い昔から、芸術家や研究者、宗教的な神秘主義者などは、最も安らからインスピレーションのわく環境を注意深く選んできた。仏教の僧侶はガンジス川の源に身を落ち着け、中国の学者は趣のある島の東屋（あづまや）で書をしたためた。キリスト教の修道院は眺望のよい丘の上に建設された。現代のアメリカでは、研究機関や企業の開発研究所はふつう、池がありアヒルが泳いでいるか、水平線の向こうに海の見える丘陵地帯に造られる。

もし、創造的に考える人や芸術家についての報告書を信じるならば、その人に適した環境がインスピレーションと創造性の源となることがよくある。しばしばフランツ・リストの言葉が繰り返される。それはロマンチックなコモ湖で書かれたもので、「私の周りの自然のさまざまな特質が……私の魂の深みにある感情——ずっと音楽に書き表そうとしてきたもの——を刺激するのを感じる」というものである。一九六七年にノーベル化学賞を受賞したマンフレート・アイゲンは、彼の最も重要な洞察のいくつかは、スイス・アルプスへの冬の旅から生まれたと言う。彼はそこで、世界中から仕事仲間を招き、スキーをしたり科学について話し合ったりしたのである。もしもポーアやハイゼンベルク、チャンドラセカール、ペーテのような物理学者の伝記を読んだら、山登りや夜空を

眺めることなしには、彼らの科学はそこまですばらしい結果は生まなかつただろうという印象を受けるだろう。

体験の質を創造的に変化させるために、自分の環境や活動、友人で実験することは有効かもしれない。出かけたなり、休暇をとったりすることは、精神を明瞭にし、見方を変え、新鮮な目で状況を見ることに役立つ。家や職場の環境の管理を引き受けること、つまり余分なものを捨て、趣味に合わせて飾り直し、個人的また心理的に心地よいようにすることは、生活を再整理する第一歩となる。

バイオリズムがどれほど重要か、また、ブルーマンデーの感じ方と週末の感じ方とはどれほど違うかについて、よく聞くことがある。実際、毎日の体験のあり方は朝から晩まで大きく変化している。早朝と深夜はポジティブな感情の多くが低く、食事時と午後は高くなる。子どもたちが学校から帰る時と、大人が仕事を終えて家に帰る時には、最も大きな変化が起こる。意識にあるものすべてが同じ方向へ向かうというわけではない。たとえば夕方、友人と一緒に出かける時、ティーンエイジャーは何時間も続けて興奮が増大していくことを報告する。しかし同時に、徐々にコントロールを失っていくのを感じている。これらの一般的な傾向に加えて、多くの個人差がある。朝型の人と夜型の人とは、一日の時間帯に逆の形で結びついている。

一週間のうちの何日かは評判が悪いにもかかわらず、全体として、人は多かれ少なかれ、毎日を

次の日と同じように体験すると感じている。実際、予想通り、金曜日の午後や土曜日は、日曜日の夜や月曜日の朝よりもわずかによいが、違いは思ったほど大きくない。重要なのは、自分の時間をどのように計画するかである。何もすることがなければ、日曜日の朝はまったく憂うつなものになるだろう。しかし、計画していた活動や、教会へ行くようないつもの儀式を楽しみにしていたら、一週間のうちのハイライトになるだろう。

一つの興味深い発見は、たとえば週末や、勉強や仕事をしていない時に、頭痛や背中の痛みのような身体症状が、かなり多く報告されることである。ガンのある女性は、友人と一緒にいる時か、何かの活動に関わっている時は、その痛みさえ我慢できるものになる。痛みは、何もすることがなく一人でいる時にひどくなるのである。心理的エネルギーがはつきりした仕事にとどまっていないと、自分の身体の悪くなっているところに気づきやすくなるらしい。これはフロー体験について知られていることに当てはまる。たとえば伯仲した試合をしている時、チェスの選手は空腹にも頭痛にも気づかず、何時間も続けることができる。試合中の運動選手は、試合が終わるまで痛みや疲労に注意を払わないでいることができる。注意を集中すると、小さな痛みや苦しみは意識に上る機会がないのである。

もう一度言うが、生活のほかの条件と同じように、一日の時間との関わりで、自分にはどんなリズムが個人的に最も合っているかを見つけることは重要である。万人にとって一番よい日や、よい

時間というものは存在しない。振り返つてよく考えてみることは、その人の好みを明確化するのに役立つ。そしてさまざまな選択での実験——早起きしてみたり、午後に昼寝をしてみたり、違った時間に食事をしてみたり——は、一番よい選択を見つけるのに役立つ。

これらすべての例において、人はまるでその内面の状態が、することや一緒にいる人、場所などの影響を受ける、受身な存在であるかのように見てきた。これはある意味正しいのだが、結局、大切なのは外因的条件ではなく、外因的条件をどうするかである。一人きりで家事をして幸福になることも、仕事でモチベーションをもつことも、子どもと会話する時に集中することも、間違いなく可能なことである。言い換えれば、毎日の生活がすばらしいものになるかどうかは、結局のところ、何をするかではなく、どのようにするかにかかっているのである。

それでもやはり、意識内の情報を変換することによって、直接的に体験の質をコントロールする方法について見る前に、重要なのは日常的な環境——場所、人、活動、一日のうちの時間帯——がわれわれに及ぼす影響について考慮することである。最も鍛錬を重ね、すべての影響から切り離された神秘主義者でも、ある特定の木の下に座り、特定のものを食べ、ほかの人よりは特定の友人と一緒にいることを好むだろう。ほとんどの人は、自分の置かれた状況に、非常に敏感である。

このように、生活の質を改善するための第一歩は、毎日することにきめ細かな注意を払い、さま

さまざまな活動や場所、一日のうちの時間帯、さまざまな仲間などについて、自分がどう感じているかということに気づくことである。一般的な傾向——食事時はより幸福で、積極的レジャーをしている時に最も頻繁にフローを体験する——はおそらく、あなたの場合にも当てはまるだろうけれども、また驚くべき発見があるかもしれない。自分はほんとうに一人でいるのが好きなのだとわかるかもしれない。自分で思っていたより働くのが好きなのだとわかるかもしれない。テレビを見るより読書する方が後で気分がよいとわかるかもしれない。また、まったく逆だとわかるかもしれない。誰もが同じように人生を体験しなければならぬという法律などない。肝心なのは、あなたの場合にどうすれば最もうまくいくかに気づくことなのである。

第4章

仕事についての矛盾

仕事は、生活のために利用できる時間のおよそ三分の一を占める。仕事は奇妙な体験である。というのは、それは最も真剣で満足できる瞬間のうちのいくらかを与えるし、誇りとアイデンティティの感覚をもたすが、ほとんどの人が喜んで避けようとするものなのである。一方で、最近の研究報告によると、アメリカの八四パーセントの男性と七七パーセントの女性が、もう仕事を必要としないくらい十分なお金を相続したとしても、働き続けるだろうと言っている。また一方で、いくつかのESM研究によると、仕事中に「ESM研究のための」シグナルがあると、一日のうちのかの時間の場合以上に、「何かほかのことをしたい」という項目が支持される。この矛盾する態度のもう一つの例は、ある本にある。その中で二人の著名なドイツ人社会学者が同じ調査結果を用いて逆の主張を展開させている。一人は、ドイツ人ワーカーはとりわけ仕事が嫌いで、より仕事を嫌う人々は、全体的により幸福だと主張した。もう一人は、ワーカーはイデオロギーに関する問題でメディアに洗脳されているために仕事を嫌っているだけで、仕事が好きな人はより豊かな生活を送ると応じた。重要なのは、どちらの結論にも理にかなった証拠があるということである。

仕事はそれが占める時間と、それが意識の中に生み出す影響の強さという点で非常に重要なので、もし生活の質を改善したいと思うならば、その多義性に向き合うことが必要不可欠である。その方向へ向かう第一歩は、仕事という活動が歴史の中でどのように発展したか、また、仕事に起因すると思われる矛盾した価値観——それは今でも依然としてわれわれの姿勢や体験に影響している——

を簡単に再考してみることである。

われわれが現在知っているような仕事は、非常に新しい歴史的発展の所産である。それは約一万年二、〇〇〇年前に集約農業を可能にした大きな農業革命以前には存在していなかった。何百万年にも及ぶ人間の進化の過程では、どの男性も女性も、自分自身と親族を養っていた。ほかの誰かのため、の仕事などというものはなかったし、狩猟採集民にとって、仕事は生活の残りの部分と継ぎ目なく統合されていたのである。

ギリシャやローマの古代西洋文明において、哲学者たちは仕事について世論を代弁しているが、それは、仕事はぜひとも避けなければならないというものだった。無為は価値あることであると考えられていた。アリストテレスによれば、働く必要のない人だけが幸福になれるということだった。ローマの哲学者は「賃金労働はあさましく、自由民に不似合いである……工芸労働はあさましく、そして小売業もそうである」という考えに賛成した。理想は肥沃な土地を征服するか購入し、奴隷または年季奉公の農奴による耕作を監督するために、財産管理の補佐役を雇うことだった。ローマ帝国では、成年男子人口の約二〇パーセントは働く必要がなかった。無為な生活を達成してきたことによって、彼らは人生のすばらしい境地に達したということを感じていた。共和国時代には、この信念にはいくらかの実質があった。というのは、コミュニティを助け、個人の潜在能力を発展さ

せる機会をもたらず、軍隊や行政上の義務を果たすために、支配階級の人々が自分たちの時間を進んで与えたのである。しかし平穩な数世紀の後、無為な階級は公的な生活から引つ込み、代わりに、自由な時間をせいたく品や楽しみを消費するために使った。

大多数の人にとって、仕事は約五〇〇年前のヨーロッパにおいて急速に変化し始めた。仕事はまた二〇〇年前にも一大飛躍を遂げ、そして依然として今なお急速な度合いで変化を続けている。一三世紀までは、仕事に必要なほとんどすべてのエネルギーは人間か動物の肉体に依存していた。水車のような二、三の原始的なエンジンが負担を軽減するのを助けていた。それからゆっくりと、いろいろなギア付きの風車が、穀物を挽き、水を運び、金属が鍛造される炉に風を送り込む仕事を引き継ぎ始めた。蒸気エンジンの発達、そしてその後の電気の発達は、エネルギーを変換して生計を立てる方法を大きく変革した。

これらの技術的大躍進の結果、仕事は単に牛や馬の方がうまくできる簡単な身体的努力と見なされる代わりに、スキルの必要な活動、人間の発明の才と創造力の表れとして見なされ始めた。カルヴァンの時代までには、「労働倫理」を真剣にとらえることが意味をもった。そしてこのためにカール・マルクスもまた、後に労働の古典的評価を逆にすることができ、そして、生産的活動を通してのみ人間の潜在能力を実現できると主張したのである。彼の立場は、アリストテレスの逆の主張の精神——余暇だけが人間を自由にするというもの——と矛盾しない。それはただ、一九世紀ま

で、仕事が無為よりも創造的な選択肢を提供してくれるように思えるようになったということである。

第二次世界大戦後の豊かな数十年の間、アメリカのほとんどの仕事は退屈で刺激の少ないものだったかもしれないが、概して、それらは適正な生活状況と適当な安定を供給した。仕事がなくなるか、なくならないとしても、やり終えるのに一週間に二、三時間しかかからない純粋なホワイトカラーの管理の仕事に変質させられそうな新しい時代について、いろいろな噂が流れていた。これらの予想がどれくらい非現実的だったかわかるまでに、長くはかからなかった。十分な賃金を受け取っていないアジアや南アメリカの人々に労働力市場で競争させた世界的な競争は、再びアメリカ合衆国の仕事に容赦のない評価を与えている。いよいよ、セーフティネットが破綻の危機にさらされるにつれて、人々はより頻繁に恣意的な条件で、未来についての大した保証もなしに働かなければならなくなっている。そのため現在でさえ、仕事のあいまいさの深さは依然としてわれわれを悩ませる。われわれは、仕事が人生の最も重要な要素の一つであることは知っているが、一方で、どちらかといえば仕事をしていくくないと思いつながら仕事をするのである。

仕事に対するこれらの相反する態度を、われわれはどのようにして身につけるのだろうか。そして今日の若者は大人として生産的な仕事をするために要求されるスキルや訓練をどのようにして身

につけるのだろうか。これらの疑問は、決して取るに足らないものではない。それぞれの世代において、仕事はいよいよ不明瞭な概念になっている。そして若者にとって、自分たちが成長した時にどんな仕事待ち受けているかを知り、それらに備える方法を学ぶことは、ますます困難になっている。

昔は、また今でもある程度は、アラスカやメラネシア（オーストラリアの北東に連なる南太平洋の諸島）の狩猟社会や漁撈社会では、かつて世界中至る所にあつた様式を、依然として見ることができると。つまり、子どもたちは幼い時から両親の仕事を手伝い、そして徐々に、途中でためらうことなく、生産的な大人として振舞っていることに気づくのである。イヌイットの少年は二歳になるとおもちゃの弓を与えられ、すぐに弓矢の練習を始めた。四歳までにはライチョウを射止めることを期待されたかもしれない。六歳ではウサギ、そしてそこからカリブーやアザラシへと進んだ。彼の妹も、革を乾燥処理したり、料理や裁縫をしたり、幼いきょうだいの世話をしたりして親族グループの女性を手伝い、似たような発達過程を進んだ。そこには、人が成長する時に何をすべきかということについて、何の疑問もなかった——選ぶべき選択肢はなく、生産的な大人になるためのたった一本の道があるだけだった。

約一万年前に農業革命が都市に可能性をもたらした時、専門化した仕事が見え始め、選択の幅が若者に開かれた。依然として、彼らのほとんどは結局、両親のしていることをしたが、それは二、

三世紀前まで主に農業だった。急成長している都市経済の中で運を試すために、非常に多くの若者が農場から都市へ移動し始めたのは、一六、一七世紀になってからだった。いくつかの概算によると、ヨーロッパの一部の田舎の少女の八〇パーセントが、一二歳までに、農業をしている両親の元から去った。男の子は平均一四歳までに去った。ロンドンやパリで待っている仕事のほとんどは、家政婦や馬車の馭者、運搬人、洗濯女といった、現在ではサービス産業と呼ばれるであろうものだった。

状況は今では随分違っている。最近の研究では、数千人の典型的なアメリカ人ティーンエイジャーに、大人になったらどんな仕事につきたいか尋ねた。結果は表3に示されている。それが示しているのは、青年は専門職につくという非現実的な高い期待をもっているということである。一五パーセントが医師か法律家になると期待しているが、一九九〇年の国勢調査によると、労働力人口に対する医師と法律家の実際の割合よりもそれは約一五倍高い。二四四人のプロのスポーツ選手になりたいと期待している青年のほとんどがまた、がっかりすることになるだろう。というのは、彼らは、およそ五〇〇倍、可能性を過大評価しているからである。都心部のマイノリティーの子どもたちは、裕福な郊外の子どもたちと同じ割合で、専門的な職業につくことを期待している。実際には、同じ都市のアフリカ系アメリカ人の青年の失業率が五〇パーセント近くになるという事実にもかかわらず。

将来の職業選択についての現実性の欠如は、一部、急速に変化する大人の仕事の現状のせいであるが、また、意義ある仕事の機会や大人のワーキング・モデルから孤立した多くの若者によって引き起こされる。予想に反して、裕福なティーンエイジャーは実際、より貧しい生徒よりも、高校時代により頻繁に働く。そうする必要はないのだけれども。そして、豊かで安定した環境で成長した子どもが家や近隣、コミュニティで生産的な仕事に触れることは、より多い。全体としてそのような機会はまだであるが、建築家になろうと計画し、親戚の建築事務所で設計を学び、近所の家の増築のデザインを手伝い、地元の建設会社で見習いになった一五歳が実際に何人かいる。都心の高校では、最も人気のある非公式の職業カウンセラーは、学校のガードマンだった。彼は目端が利く少年には暴力団で仕事を見つめるように勧め、容姿のよい少女にはいわゆるモデルの仕事に向かうよう指示していた。

ESMの結果によれば、若者は年長者が仕事に対してもつ相反する感情を非常に早くから身につけるようである。一〇歳か一一歳までには、一般社会に典型的なパターンを自分の中にもっていた。していることがより「仕事の」か「遊び」的か（もしくは「どちらでもある」か「どちらでもない」か）と尋ねられた時、第六学年ではほとんど例外なく、学校の学習時間は仕事で、スポーツは遊びだと答えた。面白いことに、若者が仕事と呼ぶことをする時はいつでも、典型的に、自分がしていることは将来のために重要であり、高い集中力を要し、高い自尊感情を含むと言う。しかしまた、仕事の

第4章 仕事についての矛盾

表3 アメリカのティーンエイジャーはどんな仕事につくことを期待しているか
3,891人のアメリカの青少年へのインタビューに基づく、将来つきたい仕事
ベスト10

仕事	順位	回答に占める率 (%)
医師	1	10
ビジネスマン	2	7
法律家	3	7
教師	4	7
スポーツ選手	5	6
エンジニア	6	5
看護師	7	4
会計士、公認会計士	8	3
心理学者	9	3
建築家	10	3
その他	—	45

(出典：Bidwell, Csikszentmihalyi, Hedges, and Schneider 1997 より改変)

ようなことをしている時は、平均より幸福でなくモチベーションも低い。一方で、遊びと呼ぶことをする時は、重要性が低く集中力をほとんど要しないと思っっているが、幸福でモチベーションがある。言い換えれば、必要だが楽しくない仕事と、楽しいが役に立たない遊びとの分離は、後期子ども時代に完成される。若者が高校を卒業してからはそれがさらに顕著となる。

同じ若者たちがそのうちに働き始めると、職場から、正確に同じ体験パターンを報告してくる。アメリカでは、ほとんど一〇人に九人のティーンエイジャーが高校時代に仕事についてたことがあり、これはほかのドイツや日本といった先進国に比べて非常に高い割合である。ドイツや日本では、高校時代にパートタイムの仕事につく機会はより少ない。ドイツや日本などで

は両親は子どもに、将来の仕事に関係のない仕事で気を散らすよりも、できるだけ勉強に時間を使ってほしいと思つてゐる。われわれの研究では、アメリカでは第一〇学年の五七パーセント、第一二学年の八六パーセントの生徒が、ふつうファストフード店員、販売や営業の仕事、ベビシッターとして賃金のある仕事についたことがある。ティーンエイジャーは仕事についている時、非常に自尊心が高まることを報告している。彼らはしていることを重要で多大な集中力を要することとして見ている。しかし彼らはいつてもよりも幸福ではなく（学校にいる時ほど不幸ではないが）、楽しんでゐない。言い換えれば、二面性のパターンは彼らの仕事人生のまさに最初の一步で固められてゐるのである。

しかし、仕事は若者が体験する最悪のものでは決してない。彼らが報告する最悪の状態は、することが仕事のようでも遊びのようでもない時である。これはふつうは生活維持活動、受身的レジャー、人とのつきあいなどの場合だが、彼らの自尊心は最も低く、することは重要性をもたず、幸福とモチベーションはともに平均を下回る。しかし、若者にとつて「仕事でもなく遊びでもない」状態は一日の平均三五パーセントを占める。とくに親がほとんど教育を受けていない子どもたちは、することの半分がそれ以上がこの種のものだと感じてゐる。一日のほとんどを重要でもなく楽しくもないと体験して成長する人は、将来に大した意味を見出せないだろう。

幼い頃に設定された態度は、人生の最後まで、仕事をどのように体験するかを色づけ続ける。仕事では、人は精神と肉体を完全に使う傾向がある。そしてその結果として、することが重要だと感じ、仕事をしている間は自分自身に満足するのである。しかし、モチベーションは家にいる時より低く、気分の質も家にいる時より悪い。給料や地位、自由という点で非常に大きな違いがあるにもかかわらず、マネージャーたちが仕事でより創造的で活動的だと感じるのはほんの少しだけであり、一方、事務や生産ラインのワーカーが、それほど不幸で不満なわけではない。

しかし、男性と女性とでは、家庭の外での仕事を違った形で体験する傾向がある。伝統的に、男性のアイデンティティと自尊心は、彼ら自身と家族に役立つために、環境からエネルギーを獲得するための能力に依拠してきた。男性が必要な仕事をすることから得る満足が部分的に遺伝学的にプログラムされたものであると、完全に文化から学んだものであると、事実が多かれ少なかれ、稼ぎ手ではない男性はある程度はみ出し者であるということである。一方、女性の自尊感情は、子どもを育てるのに適した物質的、感情的環境や、大人にとって心地よい環境を創造する能力に依拠してきた。このようなジェンダー・ステレオタイプを避けようとしてわれわれがどれほど啓発されようと、このステレオタイプはなくならない。ティーンエイジャーの少年は依然として警察官や消防士、エンジニアになりたがり、一方、少女は主婦や看護師、教師になるのを楽しみにしている——少女たちは今日では、また専門職や医師、法律家になりたいと考えており、割合としては少

年におけるよりも高いのである。

男性と女性の心理的経済感覚における有給の仕事の役割が異なるので、仕事に対する二つの性の反応はたいへい異なっている。依然として相対的に、仕事に第一のアイデンティティがあるというキャリアアウーマンは少なく、事務やサービスで働く女性、また経営者として働く女性でも、ほとんどの女性は、自分たちの外での仕事、しなければならぬことというよりは、したいことであると考えられる傾向にある。多くの女性にとって、仕事はより自発的なものである。それはより遊びのよう、取捨選択のできるものである。彼女たちの多くが、仕事で何が起きようと重要ではないと感じている。そしてそれゆえに、逆説的に、彼女たちは仕事をより楽しめるのである。たとえば事態が悪くなり、解雇されたとしても、彼女たちの自尊心は傷つかない。男性とは対照的に、自己イメージは家族に何が起るかということに、より大きく依存している。貧しい親がいること、または学校で問題を抱えた子どもがいることは、仕事で何が起るよりも、非常に大きな心の重荷である。

結果として、とくに家事と比較して、女性は一般的に男性よりも、雇用されていることをよりポジティブに体験する。たとえば、二人とも働いているカップルを対象に実施したESM研究では、リード・ラーソンは、事務やコンピュータの仕事、セールス、会議、電話の応対、仕事に関係するものを読んでいる時などに、女性は男性よりも比較的ポジティブな感情を報告することに気づいた。

女性が男性よりもポジティブでない体験をした仕事に関係する唯一の活動は、職場から持ち帰ったプロジェクトに関して家で働いた時で、このような状況では、彼女たちは仕事に関連したことがらに加えて家事にまで責任を感じているのだから、当然である。

家族と仕事が課す二重の危険は、女性の自尊感情に対する非常な重荷になりうる。フルタイム、パートタイム、また週に数時間だけ働く、小さな子どもがいる母親についての研究で、アン・ウェルズは、最も高い自尊感情が一番働く時間の少ない母親によって報告されることに気づいた。そして、最も低い自尊感情が一番長く働く母親によって報告されたのである——すべての女性が、賃金をもらって外で働くことを、家で働くよりも楽しんでいるという事実にもかかわらず。ここでも、この発見は自尊感情のあいまいな意味を示唆する。フルタイムで専門的な仕事を持ち、家族のいる女性は、彼女たちがやり遂げていることが少ないからではなく、やり遂げられるであろうことよりも多くを自分たちに期待するために、より低い自尊感情しかもてないのかもしれない。

これらの論点は、給料のためにする仕事と、伝統的に女性が家族のためにするように期待されてきた家事との間の仕切りが、どれほど恣意的なものであるかに注目させる。エリーズ・ポールドリングとその他の社会経済学者が指摘してきたように、生活維持のための仕事は生産的ではないかもしれないが、サービスとして対価を支払われなければならない。その請求金額はGNPに近くなるかもしれない。母親が子どもを養育し、病気の面倒をみ、料理をし、洗濯をするなどのコストは、

さらに市場レートでは国全体の支払給与総額の二倍になるかもしれない。そしておそらく、より人間的な経済を採用することを余儀なくさせるだろう。しかし一方では、家事をすることは既婚女性の自尊心を補強するかもしれないと同時に、感情的幸福にはあまり貢献しない。料理、買い物、家族のために車を運転すること、子どもの世話をすることは、平均的な感情だけを伴うものである。しかし、家の掃除やキッチンの掃除、洗濯、家の周りのものを修理すること、家計の帳尻をあわせることは、一般的に、女性の一日で最もネガティブな体験である。

仕事には確実に好ましくない点があるが、仕事がないのはより悪い。古代の哲学者は怠惰を支持して長所をいろいろと言ったが、彼らが思っていたのは、多くの農奴や奴隸をもつ土地所有者の怠惰である。十分な収入のない人に怠惰が強制されると、自尊心の深刻な低下と全般的な気力の低下を生み出す。マンチェスター大学の心理学者であるジョン・ヘイワースが示したように、仕事をしていない若い男性は、比較的豊かな失業補償をもらっていても、人生に満足を見出すのは非常に困難である。一六か国の一七万人のワーカーを含む研究の編集において、ロナルド・イングルハートが気づいたのは、ホワイトカラーのワーカーの八三パーセント、手仕事をやるワーカーの七七パーセントが人生に満足していると言っているが、失業者では六一パーセントだけだということである。人は創造のために働く必要はなく、創造の恵みを楽しむためにつくられたという聖書の示唆は、事実と一致しないように思われる。ふつうは仕事によって与えられる目標とチャレンジがなけ